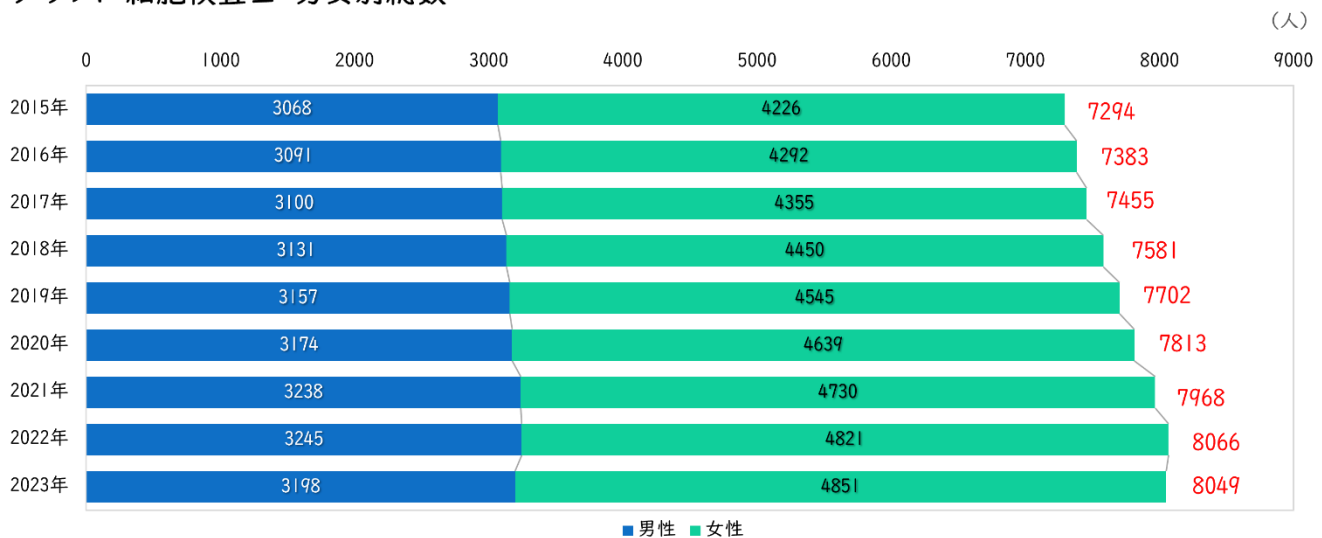


【はじめに】

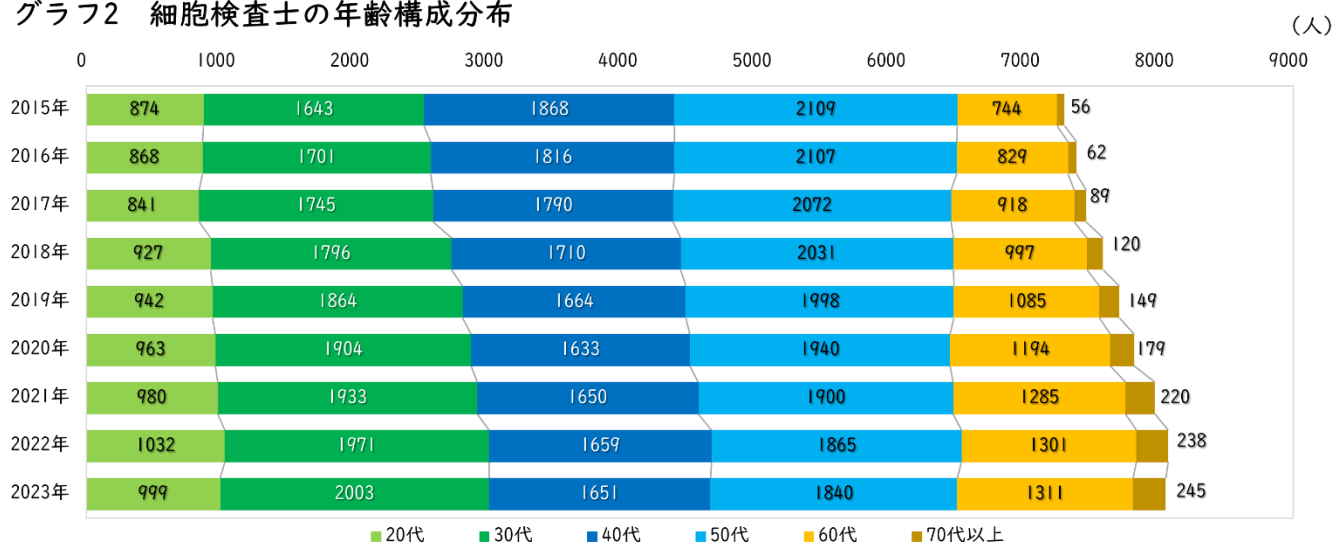
2009年に加藤元あり方委員長により細胞検査士実態調査が報告された（細胞検査士会会報 2009；45：13-16.）。その中で10年後の細胞検査士の実態が予想されたが、その調査より10年以上が経過し、再度日本臨床細胞学会事務局に提供依頼したデータを元に解析・検討した。細胞検査士の実態として正会員の経年推移・年齢分布、各都道府県の細胞検査士平均年齢や養成機関・学生と一般受験者との合格率を検討した。これからの細胞検査士のあり方について会員の皆様の参考になれば幸いである。

【アンケート調査結果】

グラフ1 細胞検査士 男女別総数

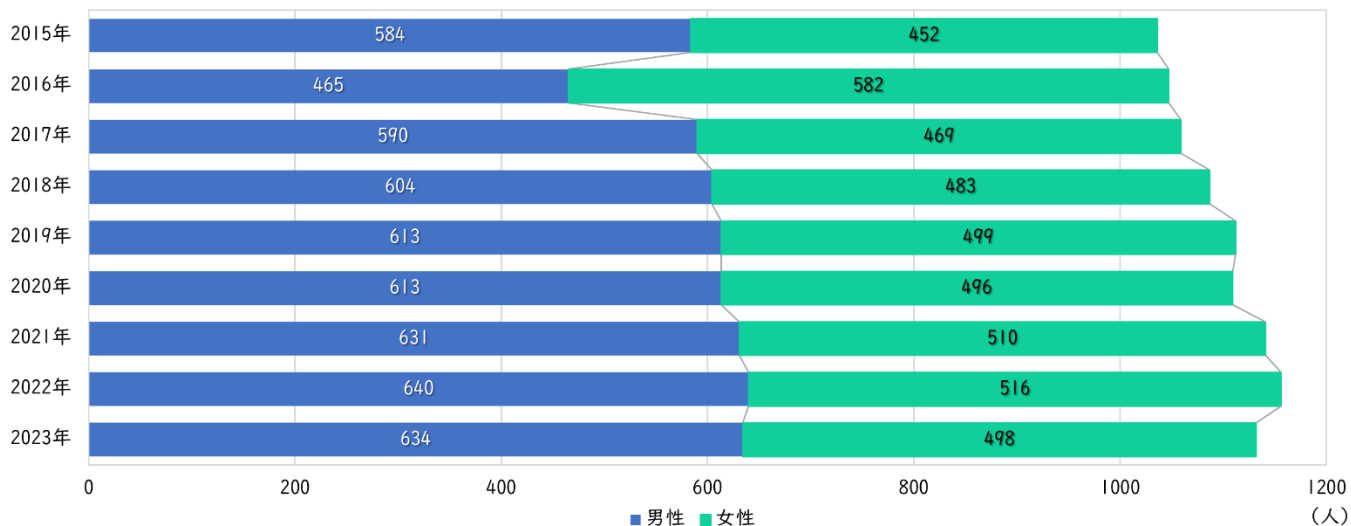


グラフ2 細胞検査士の年齢構成分布



男女別総数（グラフ1）では2015年と2023年の9年間で755名増加しているが、男性は3068名から3198名と約4%の増加に対して、女性は4226名から4851名と15%増加している。また年齢構成分布（グラフ2）をみると30代までの若い世代と60代以降の世代が増えている。10年間隔で区切った各年齢構成が9年間で少しずつ次の年齢構成へ以降することが考えられ、それにより60歳以降が増加していると考えられる。同様な現象は40歳、50歳代にはみられず、ともに減少傾向にある。60歳代は9年間で567名（約1.8倍）増加、しかし40歳代は217名（約0.88倍）減少、50歳代は269名（約0.87倍）減少している。

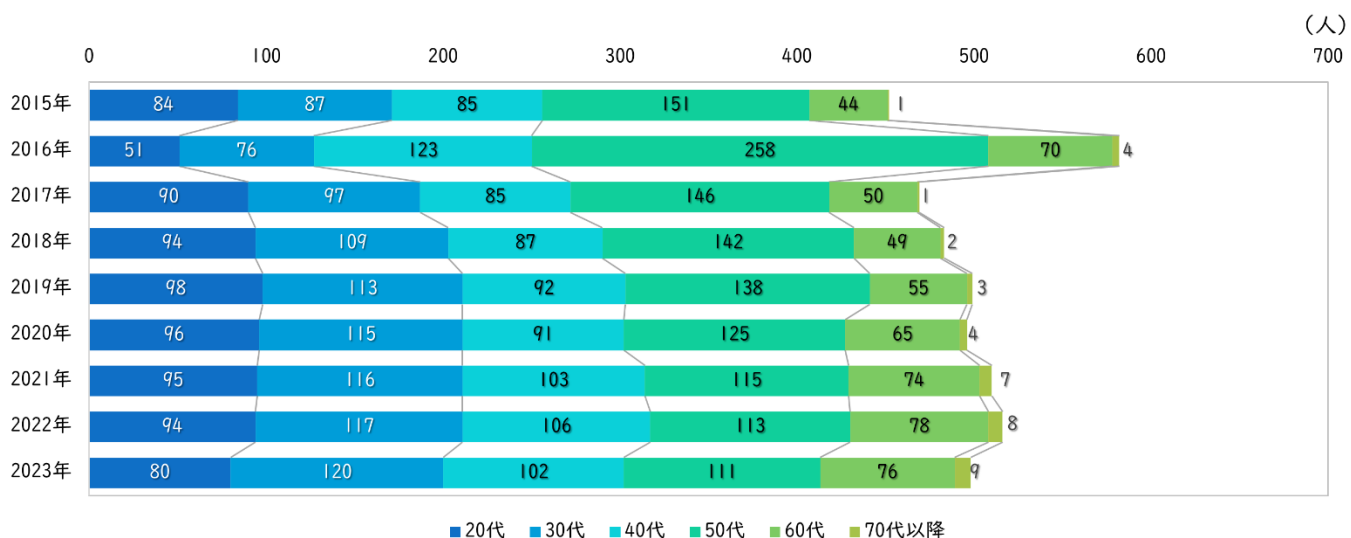
グラフ3 正会員数 男女別内訳



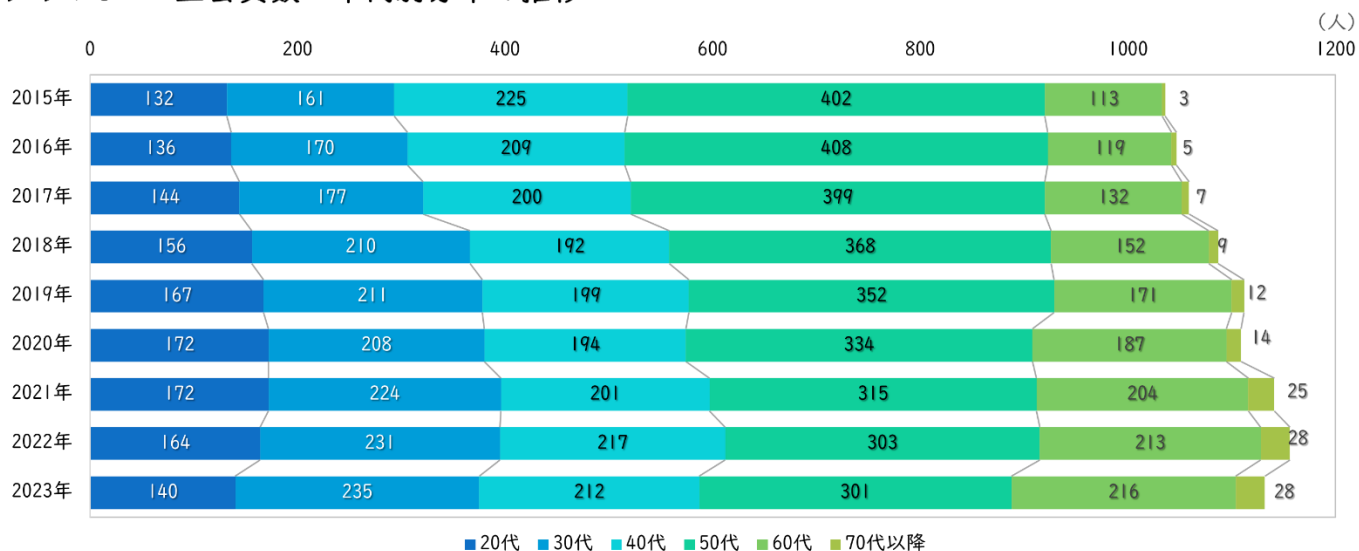
グラフ4 正会員数（男性）年代別分布の推移



グラフ5 正会員数（女性）年代別分布の推移



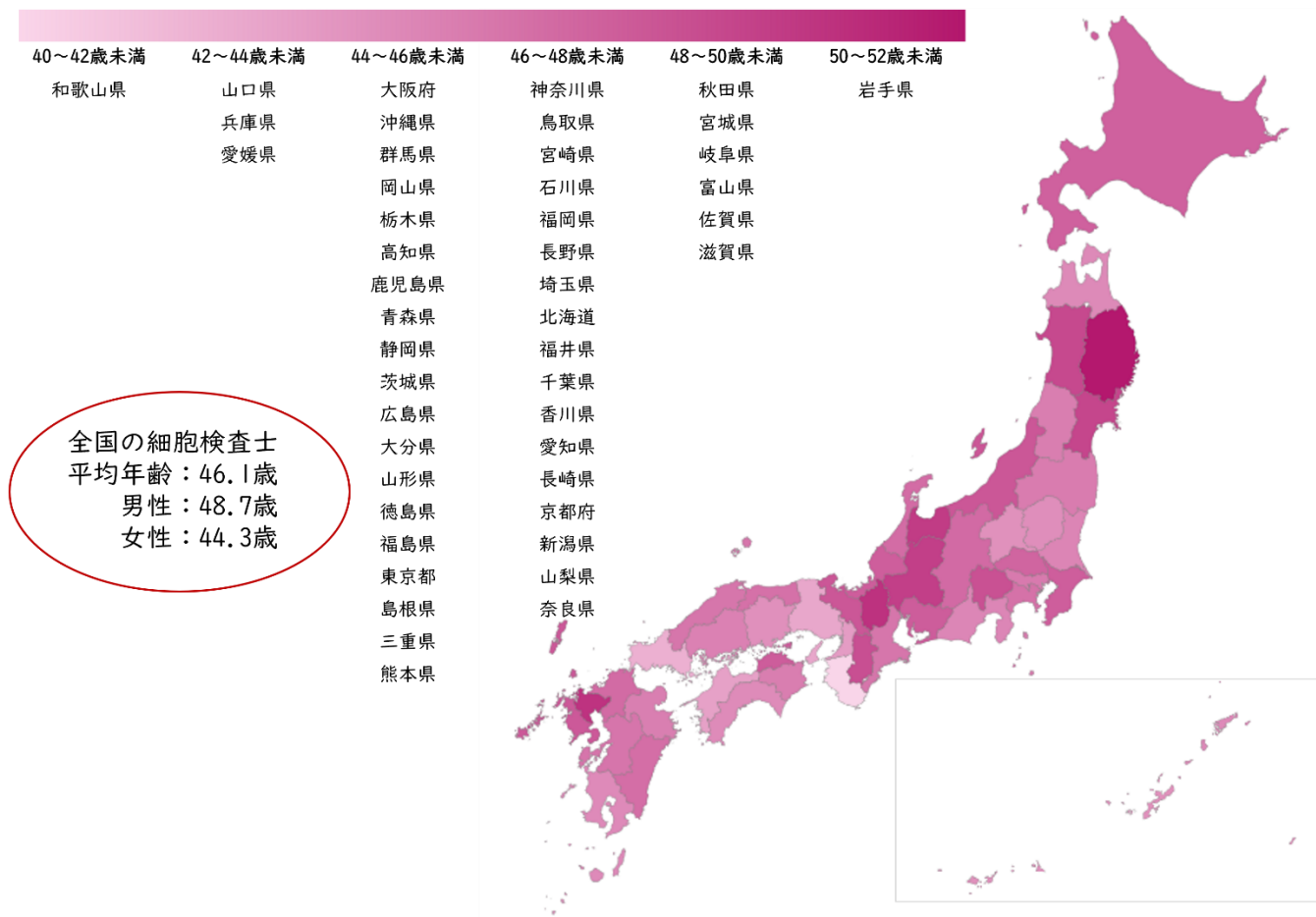
グラフ6 正会員数 年代別分布の推移



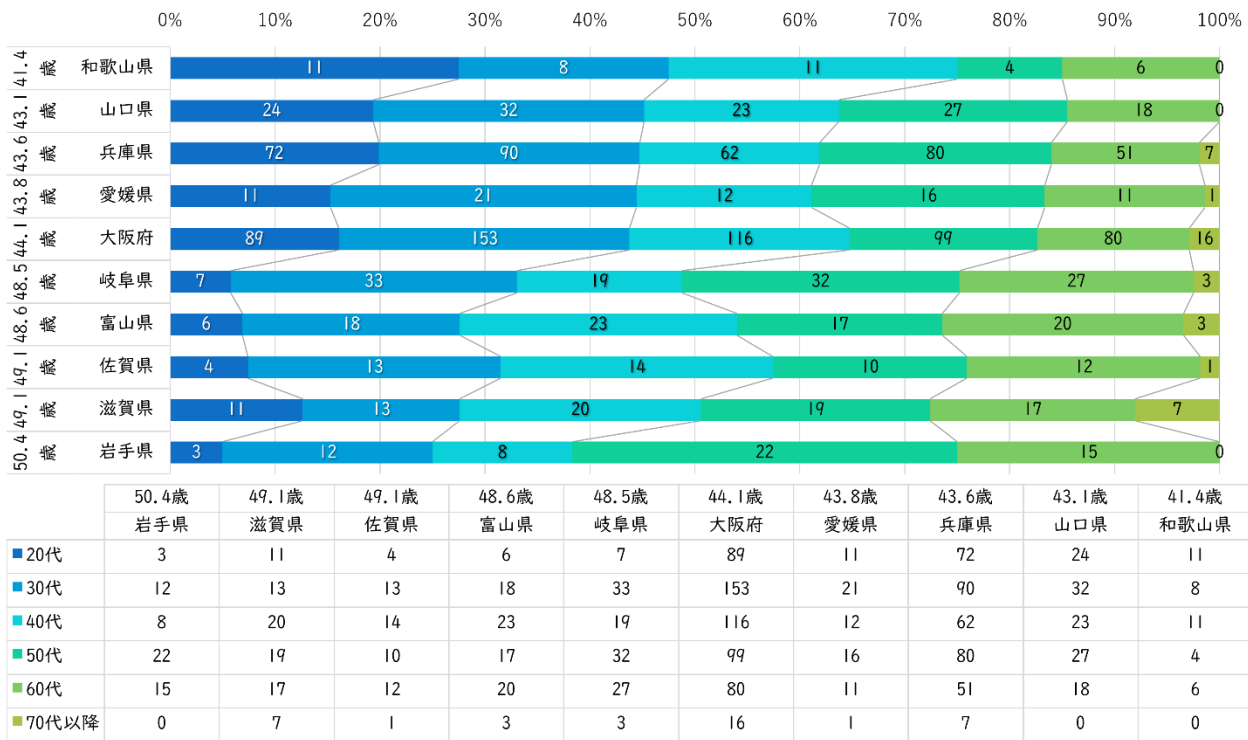
男女別総数（グラフ1）では女性の方が多くにもかかわらず、正会員の男女別内訳（グラフ3）をみると2016年を除いて男性の割合が高い。2015年から2023年の9年間に755人細胞検査士が増加しているが、正会員は96人しか増えていない。

正会員男女の年代別分布（グラフ4、5）をみると男性では2016年に女性では2017年に50歳代の正会員が前年より100人近く減少している。翌年男性は再び100名近く増加しているが、女性はそのままで推移している。男女とも50歳代は徐々に減少しているが、男性では60歳代は2倍ほど増加している。男女まとめた正会員の年代別推移（グラフ6）をみると40歳代はほぼ現状維持、50歳代は100人程減少している。

グラフ7 都道府県別 細胞検査士の平均年齢（2023年）

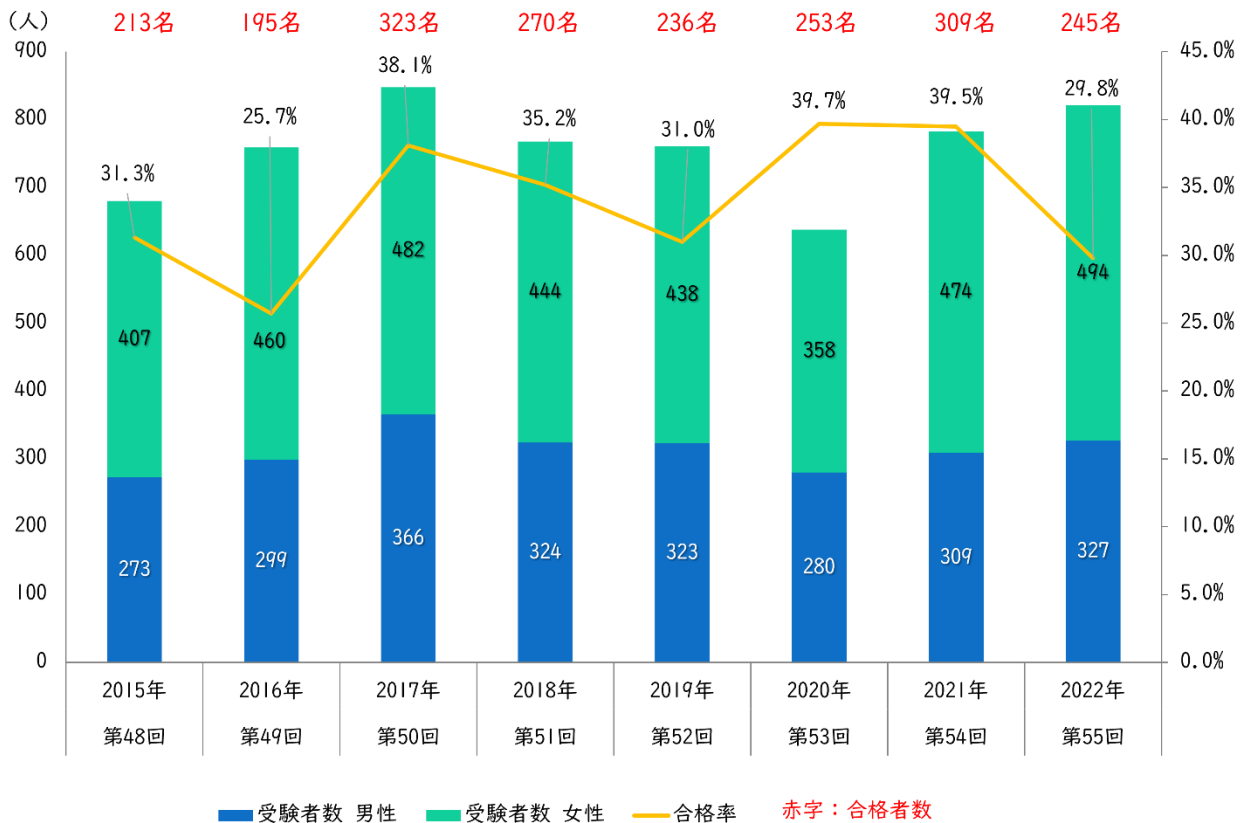


グラフ8 細胞検査士平均年齢の高い・低い主な支部の年齢構成の分布

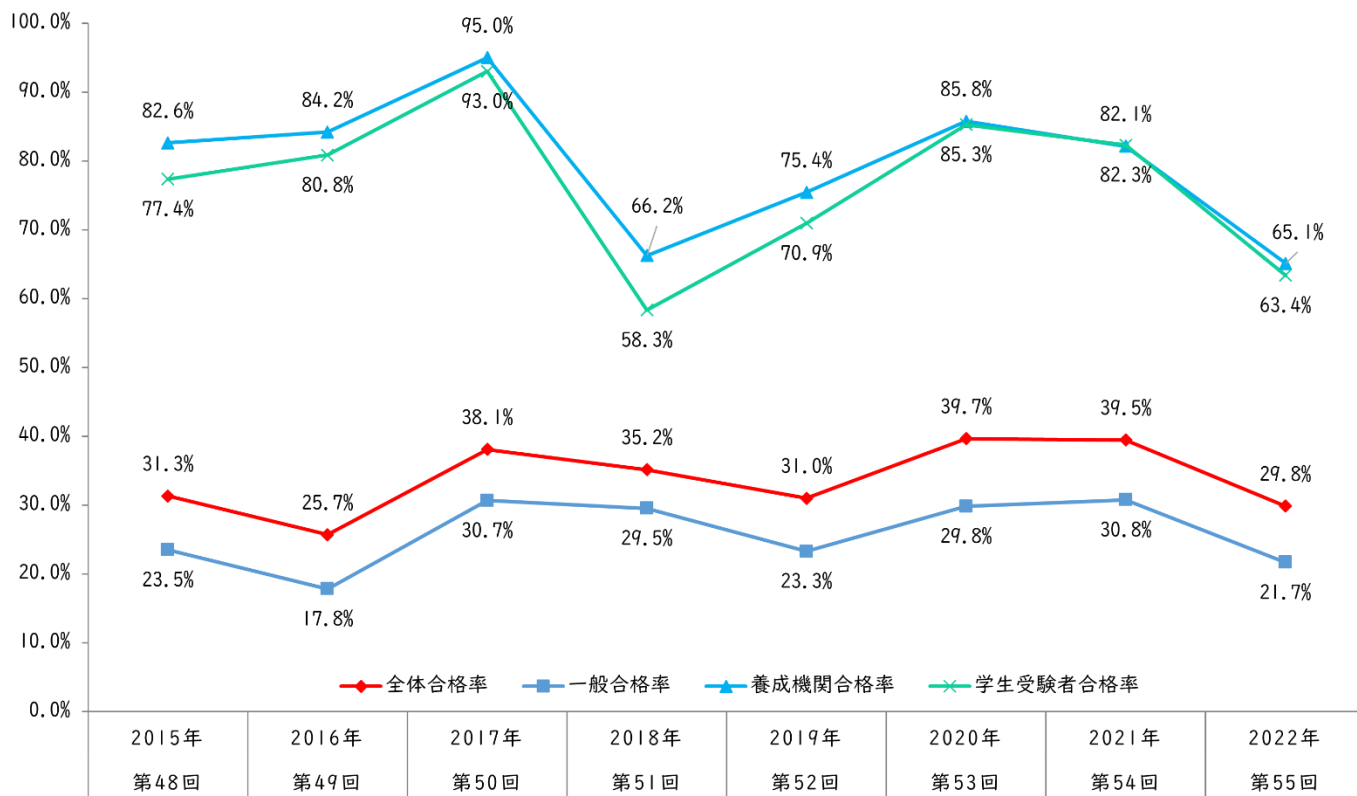


都道府県別細胞検査士平均年齢（グラフ7, 8）では和歌山県と岩手県では9歳の開きがあり、他の多くの県は44～48歳代が占める。

グラフ9 細胞検査士資格認定試験 受験者の推移



グラフ10 細胞検査士資格認定試験 受験者別合格率



細胞検査士資格認定試験受験者数（グラフ9）は2020年にコロナ感染拡大の影響により減少するも、それ以降は増加傾向にある。受験者別合格率（グラフ10）では養成機関、学生は合格率高く、両者に大きな違いはみられないが一般受験者はそれに比べると合格率が半分以下と低い。養成機関、学生が全体の合格率を上げている現状である。

【考察】

男女別総数では男性が微増なのに対して、女性は確実に増加している。2023年の合格者数が公表されていないので結果とは異なり2015年から2022年の8年間の比較になるが、合格者は2044名なのに対し772名増加に留まる。合格者に対して増加分が小さい。これは恐らく定年退職された方がその後、細胞診検査に従事しないことにより脱会したと推察される。定年退職後も細胞診に従事できる就労環境を整えることが必要かもしれない。しかしながら、子宮頸癌検診がHPV単独検査になる方向性が示され、特に検診センターや検査センターの細胞診件数の減少が予測され、就労機会が失うことが危惧される。若い世代が増えていることは細胞検査士会にとって明るい展望だが、40代・50代のこれからの細胞検査士会を担う中堅世代が減少していることは問題がある。

正会員は男性では2016年に女性では2017年に50代の正会員が前年より100人近く減少している。グラフ4の年齢構成分布の2016年、2017年をみても細胞検査士数の大きな減少は無いことから、この急激な減少は退会による減少ではなく、正会員から準会員へと変更したことが原因と考えられる。正会員から準会員へとどうして変更されたのか、その要因は明らかでは無いが会費が一番大きな問題だと考えられる。正会員を増やすためにどうすれば良いのか、長年細胞検査士会役員会で検討したが中々良い案が出て来ない。正会員数が9年間で40歳代はほぼ現状維持、50歳代は減少している。これから細胞検査士会を担っていく中堅細胞検査士の正会員が減少していることは大きな問題である。現状では正会員と準会員の違いは日本臨床細胞学会の運営に関われるか否かだけである。細胞検査士会は準会員が学会運営に少しでも関わりたいと思うような意識改革を進めていかなければならないと思われる。

都道府県別細胞検査士平均年齢では多くの県が 44～48 歳代であり、勤務先で中堅として、また後輩への指導を考えるとこれくらいの平均年齢が妥当なのでは無いだろうかと思われる。和歌山県では 40～42 歳と平均年齢が若く、20～40 歳代が 30 人（75%）、50～60 歳代が 10 人（25%）であり若手と中堅、ベテランとのバランスがよいのではないかとされた。一方岩手県は平均年齢が 50～52 歳と高く、50～60 歳代が 61%と多くを占め、20～40 歳代は 39%と少ない。将来を見据え、若手の育成が大きな課題ではないかと思われた。

細胞検査士受験者の動向をみると細胞検査士資格認定試験受験者数は増加傾向にあるも、受験者別合格率をみると一般受験者の合格率が養成機関・学生と比較して低い。一次試験での科目数が多いことや勤務しながら勉強しなければならず、一般受験者にとってはかなりハードルの高い試験となっていると思われる。一般受験者の合格率を上げるために精度保障委員会をはじめ、各都道府県細胞検査士会などでも講習会を開催しているが 2019 年以降のコロナ感染拡大の影響により、鏡検実習や他施設で標本を鏡検する機会が減ったと考えられる。自施設では扱っていない臓器など他施設に標本を鏡検しにいかなければならない受験者にとっては、鏡検する機会が減り、2 次試験は難しくなったと考えられる。この一般受験者の合格率をあげるために細胞検査士会としてできることをさらに検討する必要があるのではないだろうか。

【まとめ】

細胞検査士受験者数の増加により細胞検査士数は増加しているにも関わらず、正会員数は殆ど変化がみられない。どうすれば正会員を増やすことができるのか、改めて細胞検査士会は考えていかなければならない。

将来的に子宮頸癌検診が HPV 単独検査になれば、健診センター・検査センターの需要の減少が予想され、細胞検査士の就労機会が失われることが予想される。日本臨床細胞学会とともに協力して検討を進めていく必要があると思われる。

都道府県によっては細胞検査士の年齢構成分布に違いがみられ、将来的に各都道府県の細胞検査士会活動に影響がでることが考えられる。細胞検査士会都道府県代表者会議などにおいて、各都道府県代表者が各都道府県の現状・問題を共有し、解決策を検討することが望まれる。